

ハンガリー農業博物館を訪ねる*

堀尾尚志**

昨年9月、ブダペストにおいて第8回国際農業博物館会議が行われ、ハンガリー農業博物館がその会場となった。同館は世界的にみても歴史のある屈指の農業博物館であるが、我が国ではほとんど知られていない。今回、会議に参加し同館を訪ねる機会を得たので、その概要を紹介し、あわせ同国際会議についても若干触れてみたい。

ハンガリー農業博物館 (Magyar Mezőgazdasági Múzeum) は、ブダペスト市の東部にある市立公園のなかにあり、その建物はルネサンス・バロック様式で、まわりを大きな池で囲まれている。橋を渡って入る入口が図-1の写真で、本館の窓から眺めた中庭の研究棟が図-2である。

同館の開設は1896年であるが発議は1869年にさかのぼる。それ以来、毎年の準備費が政府から約束され基金が積み立てられる一方で、諸外国への視察や構想の練直しが進められた。1871年には、今日の日本でいう設立準備室のようなものであった農耕博物館 (Farming Museum) が、農耕協会の建物を間借りして開設された。これを機に収集物品も急増したが、それらの一部には、1878年のパリ万国博覧会に出品されたものも含まれている。そして、同館の開設にいたるのである



図-1 農業博物館の正門から本館を望む



図-2 農業博物館の中庭、向うに見えるのは研究棟。

が、関係者は農耕博物館の時期を同館の歴史に入れて通算しない。その理由は、それが独立した自前の建物を持たなかったからだけで

* 1987年12月21日受理

** 神戸大学農学部

はなく、1896年になってはじめて研究機能と
そのための部門を十分にえたということである。

開設時期についてみれば、イギリスのア
ンモリアン博物館(1683)や大英博物館(1759)
とはその古さを比べるべくもないが、産業関
係の専門博物館としては早い方に属する。ち
なみに、デンマークのエストラップにある農
業博物館が1889年、プラーハの農業博物館が
1891年、またミュンヘンのドイツ科学技術博
物館が1906年である。

開設後まもなく、老朽化した建物の補修工
事のため一時閉館を余儀なくされたが、その
後活動が本格化した。展示は、歴史的に重要
な物品だけでなく、当初よりテーマを決めた
企画がもたれ、ハンガリー農業の現在状況を
内外の参観者に伝えたり、農民に新しい技術
について教育した。また同時に、研究・教育
のための刊行活動も始められている。万国博
覧会への出品企画もその業務に含まれてい
て、1911年のトゥーリンではグランプリを受
けている。また、カイロ農業博物館の開設
(1930)とその後の活動に、ノウハウの提供
や協力を行なっている。第2次世界大戦では
空襲にあい、建物に相当な損傷を受けたが、
戦後復元され今日にいたっている。そして、
1986年現在で354,000人の来館者を迎えたが、
その内国外からは45,000人、59か国となっ
ている。

同館は、農業食品省の管轄下におかれ、現
在の館長は Lóránd SZABÓ 博士で、これ
も同省管轄下の農科大学(ブダペスト郊外のゲ
デレ Gödöllő にある)で作物学の教授を兼任
している。40人の専門家を抱えているが、彼
らの専攻は、農業技術の各分野、歴史学、民
族学などで、大学教官と同等の資格が認めら
れている。そして、次の各分野に配属されて
いる。1) 作物生産の歴史、2) 家畜飼育と畜
産製造の歴史、3) 農業史、4) 林業、狩猟、
漁業、木材産業などの展示、の4部門であ



図-3 農業博物館の分館、野外博物館(チェン
テンドレ)での1シーン。ここに見えて
いるのは全体の30分の1くらいか。

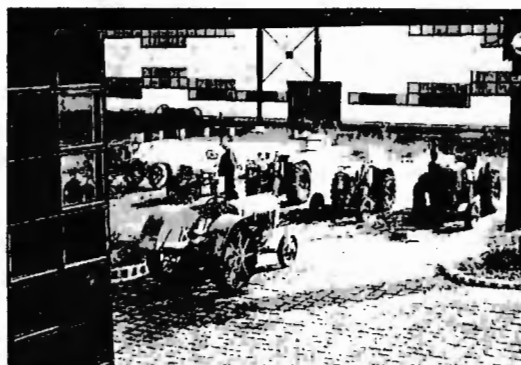


図-4 農業博物館の分館、農業機械発達史コレ
クション(ゲデレ)にて、動態保存され
た歴史的トラクタが中庭に並べられ白塵
をあげている。

る。1)と2)では、機械化、園芸、ワイン製
造などを含む技術そのものの歴史を、3)で
は社会経済や一般歴史を含む歴史が課題とな
っている。また、3)では定期刊行物の発行
も行なっており、そのうち学術的なものは以
下の3点である。

*A Magyar Mezőgazdasági Múzeum
Közleményei*(Proceedings of the Museum)
Mezőgazdaságtörténeti Tanulmányok
(Studies in the History of Agriculture)
*Bibliographia Historiae Rerum Rus-
ticarum Internationalis*

分館が全国22か所にあり、そのいくつかを
視察できたが、そのうちの2か所を紹介して

おこら。ひとつは、チェンテンドレ Szentendre という小さな町の郊外にある野外博物館 (open air museum) で、ブダペストの北約 30 km, ドナウ河畔にある。98 ha のなだらかな傾斜地が 4 区分され、それぞれ地域ごとに農家などが移築され、あるいは複製されており、総計140点に達する。無論、各戸の内部は、それらが移管前の状態に保たれている。畜力機 (家畜の直線運動的動力を回転動力に変換する) とそれに連結された製粉臼が、実際に使用できるよう動態保存されていたのが印象に残る。また、それぞれの区画では、もとの土地にあったときの配列や景観を残すように配置されており、土地の狭い日本の民家博物館にみられるような不自然さがまったくみられない。敷地がたっぷりあるゆえである。

いまひとつのものは、先に述べたゲデレにあり、農科大学に併設されている、農業機械発達史コレクションである。歴史的な農業機械の収集が1977年から始められ、現在のトラクター、刈取機及び脱穀機等の農業機械約100点がのべ床面積 4000 平方メートルに展示されている。アメリカ製をも含め古い段階の農業機械をほとんどみることができる。しかし、このコレクションの特徴は、これらのうち約半数が動態保存されていることで、トラクターのみについてみれば70%になる。我われの訪問に合わせ、約20台の歴史的トラクターが中庭に並び、館内の参観が始まると、次々にエンジンが始動された。その内の2台を運転させてもらった。

これだけの数の機械を動態保存することは容易なことではない。整備そして部品製作のための工場が併設されており、テクニシャンも見たところ10数名いたようである。このコレクションは農科大学に併設され、そこでの教育にも利用されているが、常識的にみて、農業機械コースのカリキュラムにおいても、その占める位置は低いであろう。確認するの



図一五 第8回国際農業博物館会議の開会式。農業博物館講堂にて。退屈な開会演説のあと民族コーラスが歓迎の歌をうたう。



図一六 野外博物館 (同前) への見学会にて。展示域の中庭で、手づくりパンを食べ地酒を飲む参加者の一行。

を忘れたが、大学の作工場のスタッフが、コレクションの保守・整備を兼業しているようである。

さて、始めに述べた国際農業博物館協会 (L'Association Internationale des Musées d'Agriculture) について少し述べておこら。この協会は、文字どおりには博物館学の専門学会のようにみえるが、実際には、農業に関連する歴史、民俗学、博物館学等を扱っており、実質的に農業史の国際学会といつてよい。1966年にブラーハで設立総会がもたれて以来ほぼ3年に1回開かれ、今年は第8回になる。会員数は約270、約30か国である。なお、正式の会員名簿が配られていないので正確な数字は解らない。日本からは私を入れて3名

であるが、アメリカ、カナダも同様に少なく、会員の多くはヨーロッパ各国で占められている。今回の参加者は117名（同伴者を含まず）、21か国で、会期は9月7日から5日間であった。テーマは「農業における婦人の活動、役割そして博物館におけるそれらの主張」で、それにそって55件が4つのパラレル・セッションとひとつの合同セッションで報告された。

会議の方は、主要プログラムのみ、英・独・仏3か国語の通訳が付いたが、パラレル・セッションでは、この3か国語に、ロシ

ア語・スペイン語・イタリア語が混ざり、というよりもドイツ語を中心に5か国語がたまに出るという状態で、英語しかできない少数派は早々と散歩に出かけるというひと幕もあった。しかし、会期の半分が見学のプログラムとなっており、しかも100人という少人数が毎晩パーティーをするので、個人的な交流が深められていたようである。

ちなみに、参加費は全プログラム参加で250米ドルで、宿泊費は1流ホテルで1日55米ドルであった。